

50504 総評

西躰 かずよし

市役所にバレないように踊り出す

合川秋穂 東京都

バレないように踊るというだけでもかなり刺激的なことだけれども、市役所にバレないようにとなると、それはもう普通ではないくらい刺激的である。体ごとたたきつけるかのような踊りへの衝動が作品からは漂う。

ピアノが止む観覧車を降りる

長谷川柊香 宮城県

観覧車は一周まわれば必ず降りなければならないもので、自身の意志で降りるものではないだろう。しかしそれを自身で降りるものとして引き受ける点に、この作品の美しさはある。それはどこか運命愛にも通じる。

豚ばらにしろごまをふる以前以後

松下 誠一 東京都

豚ばらにしろごまをふる行為の以前と以後を分けてしまうことは滑稽でしかないけれども、僕たちはそうゆう滑稽さのなかで生きているのかもしれない。

霧雨が
ある日の君に光沢を
もたらしていく神様だった

源楓香 東京都

ときおり神様に出会うことがある。それは嘘だと思われるかもしれない。けれども神様というのは、ひとむかしまえはもう少し身近なものだった気がする。石や、木にも神様は宿つていて。

ところでこの作品の神様は『ある日の君』がそう見えたのか、『光沢をもたらして』いる何かをそう呼んだのかはっきりしないけれども、そうしたわからなさ自体が魅力の一つとなっている。また懐かしい神様を思い出させてくれるところも。

検尿容器の忘れられた昼

広田 土 大阪府

病院の検査で提出されるはずだった紙コップが置かれたままになっているのだろうか。ここに記述される昼は、単なる概念として置かれたものではないだろう。ひっそりと息づく昼が、実体を有して昼そのものになっている。

体重がなくなっちゃって
音楽がきこえてきます
行けたら行くね

植村 日向 愛知県

ちいさな遺書かもしれない。体重がなくなるということは、それだけ清潔になるということかもしれない。主人公の耳に音楽が届く理由はそこにあるとして。遺書としてはあまりに清潔で、『行けたら行くね』の一節は、波の音に包まれる灯りのように感じられる。

月光のように
ちいさくひかる骨だった

ビスコ 愛知県

『月光のようにちいさくひかる骨』を見た気がして記憶をさぐる。そうすると自分もそんな体験をしたような気になる。同じ作者のものに『寝袋から見ている流星群』という作品があるが、こちらも同様に、登場人物の体験を追体験しているかのような錯覚に陥る。

万華鏡よりは顕微鏡だったかな
はみ出すくらいに君だったんだ

こはくいろ 大阪府

ここまで直球で書けるのは素晴らしいと思う。ただそのことを大切にしてほしいというと、どこか無責任な気もする。何かを大切にするということは何かの代償を伴うかもしれない。同じ作者の作品に「箒ではかれてゆくところ／見つめていた放課後」というのがあるが、まっすぐに書けるが故の痛みもあるのだろう。喜びを感じるアンテナは痛みを感じるそれと表裏一体に違いない。

怖いゆめのなかで君に逢いました
ケーキを崩してからくれました

マズルカ 山口県

ケーキを崩してからくれるという一節に惹かれる。かなり衝撃的だけれども、そこに惹かれるのは、悪意というものの本質を思い出させてくれるからだろう。悪意は人間においてとても根源的な感情だと思う。

ピアノピアノ
黒いピアノに春が来る

有野 水都 東京都

『ピアノピアノ』のくりかえしと、ピアノの色を敢えて黒いと書くことで、春の明るい面だけでなく、暗くて不安な側面をあぶりだしている。

リーマンの僕昼夜休みに抜け出して
60分の短歌の時間

貴田 雄介 熊本県

日常がそのまま作品になることはないけれども、それが重なる瞬間というはある気がする。この書き手は、平凡な日常を平凡なままに詠んでいるけれども、それが逆につくりものでない印象を与える。同じ作者の作品に『血液を抜く身体から少しづつ／夜が減ってくような気がする』というのがあるが同様の印象を受ける。

しゅうせん、
と呟いてぶらんこに立つ

うたた 岡山県

確かめるように『しゅうせん』と呟く姿と、不安定なぶらんこに立っている姿が重なって鮮やかな映像が映し出される。ことばはどうしてことばになるのだろうと思うときがあるけれども、こうした呟きのひとつひとつが命を吹き込むのかもしれない。